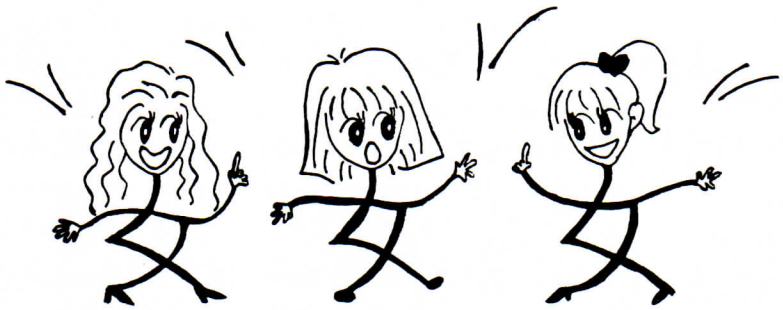
LC
りぽーと
Vol. 1

〒663 西宮市池開町6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
TEL 0798(45)3536（直通）

女から見た
女のことわざ



「女心と秋の空」　あなたは、使う？使わない？

このような、女性に関することわざばかりを集めて、「あなたは、肯定派？否定派？」とアンケート調査を実施しました。

対象者は武庫川女子大学の学生519 人です。

それぞれのことわざについて

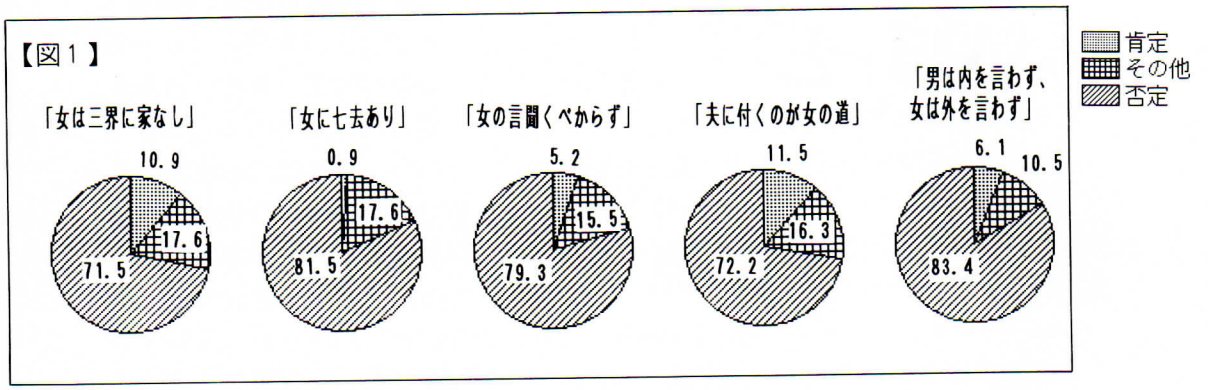
①…その通りだと思う
②…そうは思わない
③…何とも思わない
④…よく使う
⑤…使いたくない

の５つの選択肢の中から、一つか二つ選んで回答してもらいました。

①・④は「肯定派」、②・⑤は「否定派」ということにして、調査結果をグラフに表してみました。

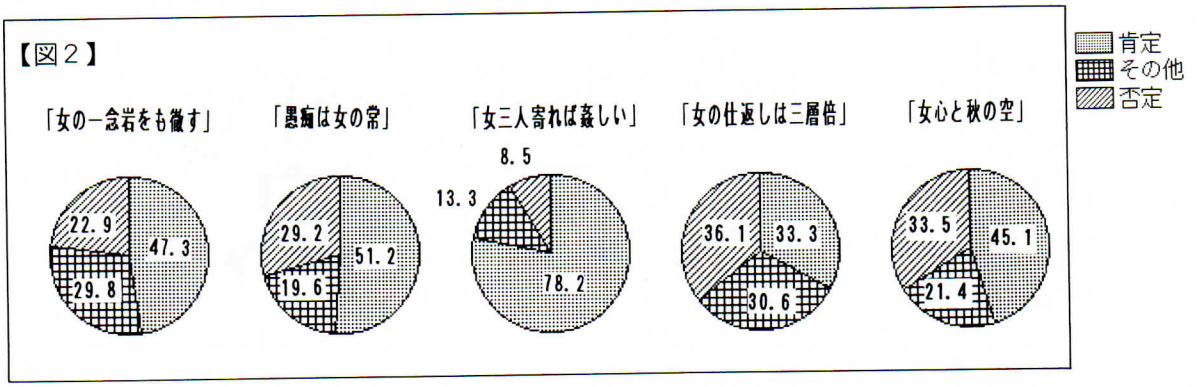
Aグループ：女性のあるべき姿を型にはめているもの
女性の人格を否定しているもの

（単位　%）



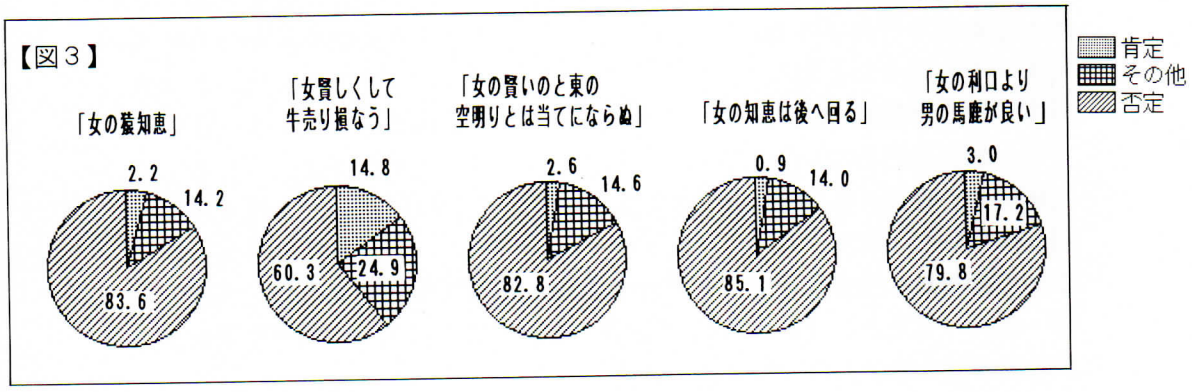
Bグループ：女性の性格をいっているもの

（単位　%）



Cグループ：女性の知性・知恵を否定しているもの

（単位　%）



《【図１】について》

Ａグループは、“女性の人格否定”ともいえることわざである。

これらに対して、否定的な回答をした者が圧倒的に多い。

「女の言聞くべからず」を除く他の４つのことわざは、「夫に従うのが女として当然のことである」という色合いが強く出ている。「女性（妻）としての一個の人格はなく、夫に付随した存在でしかない」という、非常に封建的な意味を表している。これらに拒否反応を示すのは、ごく当然のことだろう。

また、これらのことわざは普段あまり使われない。理由は、言うまでもなく、時代に逆行した、非現実的なものだからである。そして、使われなくなったことが、女子大生たちにそれらのことわざへの親しみをなくし、ことわざを支持する回答をより少なくしたとも考えられる。

つまり、“時代に逆行していることわざ”は“使われないことわざ”であり、また同時に“女性に受け入れられないことわざ”でもある。

《【図２】について》

Ｂグループのことわざは、女性の性格・性質についてのものだが、どちらかいうと、良い性格・性質というよりは、困る性格・性質を述べたものである。

しかし、どのことわざも、肯定している割合が高い。「女三人寄れば…」では、80％近くが、その通りだと思ったり、よく使ったりしている。また、Ｂグループの中で肯定している割合が一番低いのは「女の仕返しは…」であるが、それでも30％強の数字を示している。

つまり、これらのことわざの、困った性格を、女性自身が認めていることになる。その気持ちの奥には、“そのような性格が、女性の特質の一つなのだから”との開き直った気持ちがあるのかもしれない。“執念深かったり、おしゃべりだったりするのは、女だったら当たり前”と思い、さらに、これらのことわざを、“男性（あるいは、自分以外の人間）にそれを認めさせる”ための武器の一つにまで考えているのではないだろうか。

また、Ｂグループには、他のグループには見られない回答パタンがある。それは、図には表していないが、各ことわざに、「その通りだと思う（しかし）使いたくない」という回答が、10～30例見受けられたことである。これは、女性の困った性格を一方では認めつつも、同時に、自分では使いたくない、という否定の気持ちをもっている人が少数ながら存在するということである。

Ｂグループのことわざは、比較的、よく耳にしたり、使ったりすることわざである。現在でも使われていることわざだから、それだけ、受け入れられやすいといえるかもしれない。

否定的な回答も、それぞれ10～30％くらいあるが、Ａグループ、Ｃグループと比べるとやはり少ない。

《【図３】について》

Ｃグループは、女性の知性・知恵を否定しているものである。Ａグループ（図１）と同じく、否定的な回答をした者がほとんどである。

これらのことわざでは、“女はバカだ”という陰に、“男は無条件にエライんだ”という発想が見え隠れしている。正面から堂々と男女差別について述べているものであり、否定派が多いのは当然であろう。

また、その使用頻度に関しても、Ａグループ同様、最近ではあまり使われないものである。これも、やはり、女性の反発を買うことわざであり、また、身近に感じられないために使われなくなったのではないか。

今回のアンケート調査では、ことわざの内容別に、非常にはっきりとした結果が出た。人格や知性を否定するようなことわざ、女性を型にはめてしまうようなことわざに対しては、否定的で、非常に敏感に反応している。

他方、性格を述べたものに対しては、それが女性にとって良くない内容のものであっても、比較的大らかに受け入れているようだ。

また、現実とかけはなれていることわざが、日常生活で使われず、その結果、忘れられたり、聞いたことがなかったりするのは、当然の成り行きである。

女子大生を対象にした結果を見てきたが、これは、現代の日本人全般にも当てはまることだろう。学校教育の中で、「受験用」としてことわざを覚えることはあっても、日常生活の中で、教訓として生かしたり、会話の中で頻繁に使ったりすることが、まれになっているものと推測される。

今回、調査した“女性に関することわざ”は、その中のごく一部であるが、女性に関することわざを集めていくと、ほとんどが、女性を軽視または蔑視したものであることがわかる。かつて、女性が、いかに認められない存在であったかを知ることができる。また、そのようなことばが、「ことわざ」という地位を与えられて、もっともらしく、現代に存在し続けていることを、大いに問題にすべきである。

あとがき

学生の言語意識調査の結果を、『ＬＣりぽーと』第１号として出すことになりました。

「ＬＣ」とは、「LINGUISTICS（言語学）」と「CULTURE（文化）」の頭文字をとったものです。

これからも、「言語と文化」に関する調査結果を、機会をみつけてリポートしていく予定です。

最後に、アンケートにご協力いただいた学生の皆さん、ありがとうございました。

担当　言語文化研究所　佐竹秀雄・岸本千秋